約束を守る羽柴さん

平川　繁
（会員・佐伯市中村東町）

私と羽柴さんとの最初の出会いは昭和三十四年の春だった。三十三年に発足した史談会が養賢寺の上にある毛利家の墓を視察した時のことで、ちょうど私が市役所を停年退職した時であった。それ以来『佐伯史談』の配達等で度々立寄って下さったが、双方とも一杯好きなのと年令も同じということで意気投合して、お互いに胸襟を開いて話し合う仲となり、亡くなられるまで二十数年間の親交が続いた。

忘年会のことなどは必ずといってよい程相談があり、果物は市場から毎年私が自転車で会場に運んだものだった。史談会は発足して数年間は、乏しい会計で華々しい活動はできず苦労したようであった。

また羽柴さんは大変な健脚でよく登山をした。尺間山・彦岳・椿山・佩楯（はい）山・神角寺から尾高知山にも二、三回同行したが、後に続くのがいつも懸命であった。

昭和四十年一月に『佐伯史談』第一号が発行されたが、あの小さい文字を丁寧に一字一字ガリ切りをし、活字印刷になる昨年まで、実に一四三号を数える。長年にわたるその根気、そのエネルギーがあの身体のどこから出るのかと不思議に思われた。発行前になると毎晩夜半まで書き続けたという。その尊い値打が今更のように強く感じられてならない。

いろいろと思い出はつきないが、終りに氏が如何に約束を守る人であったかを述べたい。昭和五十五年の春に史談会が求菩提山・英彦山参りをした時のことであった。佐伯には以前から美しい郷土を公害から守ろうと「公害追放佐伯市民会議」という団体があった。氏はその副議長をしていた。時あたかも石油タンカーの佐伯湾錨泊の話が持ち上っていて、長崎県の橘湾に備蓄タンカーを現地視察することになり、市民会議からも二人参加を要請されて、同年四月二十日羽柴さんと私が行った時のことである。

ちょうどその時、氏は英彦山に行ったので、私には視察に行くとは言ったが参加はできないのではと思い、一人で市役所前からバスに乗った。ところが発車寸前になって息せき切って乗り込んできた。驚いて話をきくと、

この約束があったので、山は途中まで登って引返して帰って来たと言う話に、私は深い感銘を受けた。私達の視察したタンカーは日本郵船の時津丸で、長さ三三一m巾五四m二五万七千四百六十トンという巨船で、現在は臼杵湾に錨泊している。この視察によって二人とも貴重な知識を得たことを喜び合った。

氏が亡くなったことは史談会としては全く得難い人を失ったものであり、また広く佐伯市にとっても稀な郷土史家を亡くしたことになり、惜しみても余りある人であった。

最後に謹んで御冥福を祈る　合掌

簾（すだれ）山を越える

清田　義雄
（会員・佐伯市東区）

もう六年前になる。二月末の午后二時過ぎに羽柴先生から電話がかかってきた。

「どうしとるな。ちょいと歩きとうなったがついてこんな」

「おお、いくで、どこいくんな」

「すだれ山を越えてえがなあ。小野市行のバスで直見駅まで来なんせえ」

こんな誘いをうけて直見駅で落ちあった。

「あの丘んところが阿蘇熔岩の河岸台地ぢゃあ」

道路を越えて南側の山に入る。天明七年銘の六地蔵がある。銅鏡をまつるという祠を過ぎて墓地に出る。

請花・返り花の蓮華彫刻が厚味をもってしっかりした彫刻の台座で、あまり見なれない三基の墓が異彩を放っている。間（はざま）という部落だそうだ。

毘沙門庵に出る。今日は老人達がおこもりで集っている。あいさつを交して庚申塔を見る。六臂の持物がはっきり彫られている。法輪。善悪の尺度をはかるはかり綱剣・鉾・剣・剣に二猿がいる。この二猿はおもしろい。二猿で三猿の役割を果たしている。一匹は右手で目を、左手で耳をふさぎ、一匹は口をふさいでいる。

道を下って左手の丘に登る。「愛宕将軍延命地蔵大菩薩」の額をあげた祠がある。村の人にきくと「ぞんじろうさん」と言っているがどうも意味がわからない。享保年間作の石彫像がまつられている。

十号線に下って反対側の丘に登る。下から見える墓地